

脱原発とともに、日本も
核兵器禁止条約の批准を



九条はらまち

福島県南相馬市原町区
「はらまち九条の会」会報 No.332

2019(令和元)年7月28日(日)発行

福島の基盤を
守ろう！



■ **はらまち九条の会** とは、戦争放棄の憲法第9条を護って「戦争をしない国・日本」をめざし、支持政党などを問わない自由な市民の会です。随時、入会歓迎です。■ 結成は2005年12月。会員は南相馬市原町区を中心に401名。年会費千円。■ 3.11の大震災後、「事故の福島第一核発電所(原発)に世界一近くで活動できる“九条の会”を自覚し、「日本国憲法の草案を起草した憲法学者鈴木安蔵(小高区出身)の故郷の“九条の会”を誇りに活動しています。ご一緒にいかがですか。

2019年総会報告

○2019「はらまち九条の会」総会は、6月16日(日)1時~2時、南相馬市民情報交流センター・マルチメディアホールを会場に開催され、出席会員約30名が熱心に審議しました。

▶ 総会議長は、昨年に続いて角田靖夫さん。右は活動報告する早坂吉彦事務局長。



◇平田慶肇会長のあいさつ

「2005年12月に発足した本会は、今年で14年目になりました。世界各地が戦前のような状況になってきて、今こそ9条を守り戦争をくい止める活動が大事な時です。会員の皆様のご協力をこれからもよろしくお願いいたします。」

議決事項は次の通り。

①2018活動報告

- 5月 1日 改憲反対のチラシ16, 550枚を、南相馬市内の全新聞に折り込む。
- 6月17日 総会、『コスタリカの奇跡』上映会(広瀬隆氏講演会は急病で中止)
- 11月3日 あきいちと同時開催のサポートセンターフェスティバルに参加。ブースに朝倉悠三氏の震災絵日記を展示し、改憲反対の署名331筆を集めました。
- 1月13日 成人式会場前で、新成人に憲法小冊子セットを手配りする(10回目)
- 会報を6月No.314~5月No.331発行 ○依頼により、浜通りの被災地の案内

②会計収支報告・監査報告 報告通り承認。

- ③活動計画案 ○憲法9条を守る活動の拡大をはかる。 ○会員、特に若者の拡大 ○講演会や学習会、イベントへの参加。 ○1月新成人に憲法小冊子の配布。 ○会報の発行。 ○5月3日憲法を護るチラシを市内全新聞に折り込む。 ○ホームページでの広報(手続きで現在停止していますが、まもなく回復します) ○会員の協力により、「はらまち戦跡マップ」の作成を検討する。

④2019予算案 案通り承認。

⑤役員改選 現役員の再任で承認され、各人から挨拶がありました。

会 長：平田慶肇(ひらた けいせい) 事務局長：早坂吉彦 事務局次長：山崎健一
事務局：井上由美(会計) 石田賢二 番場恵子 大浦祥見 志賀勝明 田中徳雲
監 事：高橋美加子 大槻千鶴子

故郷の小高と人々を懐かしむ安蔵

演題「鈴木安蔵と故郷」 会場：南相馬市民情報交流センター

◇総会に続いて開催の「若松丈太郎氏講演会」。北海道や東京、県内各地から約60名が出席。鈴木安蔵は憲法学者ですが、短歌に親しみ、家族や故郷を懐かしむ人間的な面も話され、興味が深まる講演でした。



資料を示して話される
若松丈太郎さん

○私は1935（昭和10）年、岩手県奥州市生まれで、今月84歳になりました。福島県立高校の国語科教員になり、原町に住み小高農業高、相馬高、原町高に勤務。それぞれの高校の校史編集を担当したことは、ありがたいことでした。小高町は故郷の水沢町に似た風土で、出身者やゆかりのある著名人も多く、特に島尾敏雄や埴谷雄高、そして鈴木安蔵を挙げるすることができます。

○私の関心は文学中心で、文学同人誌『海岸線』の編集を行ったり、明治時代以後に相馬地方に関わった文学者を調べたり、原町生まれの映画監督亀井文夫の映画会も開催しました。『福島民報』「ふくしま人」で亀井文夫、大曲駒村、井土靈山、荒正人、そして昨年10月から11月まで憲法学者鈴木安蔵を執筆しました。でも私は鈴木安蔵の研究者ではありません。人物や地域のことを調べていると、向こうから興味をひく事実がやってきたりします。

○相馬高校80周年の校史を編集していた時、鈴木安蔵の愛知大学での愛弟子、金子勝立正大学教授から、旧相馬中学校卒業の安蔵について調査依頼があり、当時の学友会雑誌から寄稿文を見つけ出し、金子教授にお届けしたことが、鈴木安蔵との出会いです。



◆「日本国憲法の間接的起草者」の鈴木安蔵<写真>は1904（明治37）年3月3日小高町に生まれ、1983（昭和58）年8月7日に79歳で死去されます。

小高に住んだのは、相馬市の相馬中学校に入学する13、14歳までです。

◆かつての鈴木家は廻船問屋を営む相馬藩の大御用商人でした。しかし祖父武雄は船の難破などで事業に失敗し、父の良雄は洗礼をうけ、小高銀行支配人代理で俳句をたしなみましたが、肺結核で1904（明治37）年2月12日、安蔵が生まれる20日前に27歳で他界。安蔵は、資料のように相馬中1年生の1918年、『学友会雑誌』に「我が家」を寄稿し、家の窮状を嘆き「今我が家の歴史を語らんも涙多し」と書き、「自分の双肩に我が一家の盛衰を荷ひをるなり」と猛烈に勉強し、相馬中はじまって以来の秀才と言われました。

安蔵と姉のテル（1967年・鈴木家墓地で）▼

◆安蔵の故郷小高町への思いは強く、1973（昭和48）年の新聞寄稿文「阿武隈山脈のふもと」（『九条はらまち』No.323にも掲載、但し6カ所の誤植あり）では、小高町での子どもの頃の思い出や、小学校時代の大人顔負けの「見返れば墳墓は見えぬ蝉しぐれ」の俳句を紹介し、牧師の杉山元治郎や農民運動の平田良衛のことなど、町の様子を懐かしんで書いています。



（その②は、次号No.333に）